

# 十字架と三位一体

— モーセ像をめぐる解釈を中心に —

秋 山 学

## 序. 十字架と予型論

筆者は先に、『ヨハネ福音書』第20章において、復活したイエスがマグダラのマリアに向けて語る言葉「わたしはまだ父の許に昇っていない」(ヨハネ20,17)を、十字架上のキリストの脇腹から「血と水が流れ出た」(ヨハネ19,34)という復活を証しする出来事にもかかわらず、使徒共同体がまだ復活に対する信仰を確立していないという事態(ヨハネ20,8を参照)を表現したものだとして解釈し、ここから「キリストの復活を証しする共同体は、十字架上に構築される」という理解を提示した<sup>1</sup>。この理解は、共同体の構成員が十字架を担った姿で世に復活の生命を生きるというあり方へと展開するものであり、拙著『ハンガリーのギリシア・カトリック教会 — 伝承と展望 —』<sup>2</sup>で公にした、東方典礼カトリック教会の本質を「十字架上の聖体を構築する共同体」だとする理解と軌を一にする。『ヨハネ福音書』が描くイエス像が、すべて復活のイエスについてのものである、ということについては、これまでのヨハネ研究においてもしばしば指摘されてきた<sup>3</sup>。その復活のイエスとは、十字架上に永遠の生命を生きるイエスである、とするのが筆者の見解である。この視点は共同体論・聖体(秘跡)論・終末論など、神学上の諸問題に対し、定まった位置から回答を与えるものだと考えている。そこでさらに、教父時代以来の伝統的な聖書解釈学に基づく「予型論」、すなわち「新約聖書からの照らしによる旧約聖書解釈」に関しても、その照らしのための光源を、この「十字架上の復活共同体」に求めたい。

本稿では、『申命記』において語られるモーセ像にこの解釈、この予型論的理解を適用することを試みる。モーセは死海の東、モアブの地からその北端にある「ネボ山すなわちピスガの山頂」に登り、エリコを望む。こうしてモーセはヨルダン川の東岸に留まり、約束の地に入ることができないまま生涯を終える(申命34)。本稿ではこのようなモーセ像に対して、『ヨハネ福音書』における聖体共同体論からの照射を適用してみたい。従来の諸研究、あるいは旧約

聖書本文においては、このようなモーセ像は否定的な評価でしか捉えられていなかった。すなわち、主と民との「執り成し役」を務めるモーセをめぐり、結局彼が約束の地に入れないまま死なねばならず、何度嘆願してもこれは聞き届けられなかったということは、神がイスラエルに対する怒りをモーセに向けた結果であり、神によるモーセへの罰だと見なされているのである。その次第は、次のような箇所に表明されている。

「わたしは、そのとき主に祈り求めた。くわが主なる神よ、あなたは僕であるわたしにあなたの大いなること、力強い働きを示し始められた。あなたのように力ある業をなしうる神が、この天と地のどこにあらうか。どうか、わたしにも渡って行かせ、ヨルダン川の向こうの良い土地、美しい山、またレバノン山を見せたまえ。しかし主は、あなたたち（イスラエル人）のゆえにわたしに向かって憤り、祈りを聞こうとしなかった。主はわたしに言った。くもうよい、この事を二度と口にしてはならない。ピスガの頂上に登り、東西南北を見渡すのだ。お前はこのヨルダン川を渡って行けないのだから、自分の目でよく見ておくがよい。」（申命 3,23 – 27）<sup>4</sup>。同様の箇所は『申命記』の他の箇所にも見出される。「主はあなたたちのゆえにわたしに対して怒り、わたしがヨルダン川を渡ることも、あなたの神、主からあなたに嗣業として与えられる良い土地に入ることも決してない、と誓われた。したがって、わたしはヨルダン川を渡ることなくここで死ぬ」（申命 4,21 – 22）。

モーセがヨルダン川の東岸で没さねばならなかったということを強調するのは『申命記』の特徴であるが、このようなモーセ像は、聖書全体のなかではどのように位置づけられ、また新約からの光の中で、どのように止揚されるべきなのであろうか。これが、本稿で採り上げようとする問題である。

## I 『申命記』の構造

最初に、『申命記』および申命記史家について概観しておこう。紀元前 587 年バビロニアにより、南王国ユダが滅ぼされその首都エルサレムが陥落した後、ミツパに逃れた一派は（列王下 25,23）、そこで「ヨシュア記」から「列王記」に到る長大な史書を編纂した。彼らは「申命記史家」と呼ばれ、前 622 年に改修中のエルサレム神殿から発見された「律法の書」（列王下 22,3 – 13）すなわち「原申命記」を、自らの史書の冒頭に史書全体のモットーとして据えた<sup>5</sup>。彼らの神学的特徴は、「立ち返り」（šûb）の強調（列王上 8,33 – 40；46

— 50；列王下 23,24 — 25) にある。彼ら申命記史家たちは、南北両王国の滅亡と捕囚という破局の到来の意味を解明し、それが決してイスラエルの神ヤハウェの無力さや敗北を示すのではなく、むしろこの神の歴史における力と義の貫徹を表すものだということを示すことを目指した<sup>6</sup>。また『申命記』第 5 — 28 章（もしくは第 12 — 26 章）は、この「原申命記」の骨格の部分であるとされる（細目については諸説がある）。

『申命記』は、冒頭の第 1 章から第 4 章にかけて、モーセが神と民との間に立って取り交わしたシナイ山での契約を、モアブの地で再確認し、そのための序言を述べるという体裁を採る。まず第 1 章から第 3 章にかけて、荒野の旅に関する回顧がおこなわれ『民数記』10 章以下が要約される。第 1 章が『民数記』10 — 20 章（於カデシュ＝カデシュ・バルネア）、第 2 章が同 21 章（於モアブ）、そして第 3 章が同 21, 27, 32 — 35 章（カナンへの途上）の回顧に相当する<sup>7</sup>。

このうち、『民数記』第 21 章に関わる箇所として、『ヨハネ福音書』3 章に引用のある「モーセが荒野で蛇を挙げたように、人の子も挙げられねばならない。それは彼のうちに信を置く者がすべて、永遠の生命を持つためである」（ヨハネ 3,14 — 15）が想起される。この箇所については後ほど仔細に検討するが、この『民数記』21,4 — 9 に記される「蛇」の記事は、『申命記』では 2,13 — 15 「われわれはゼレド川を渡ったが、カデシュ・バルネアを出発してからゼレド川を渡るまで、38 年かかった。その間に、主が彼らに誓ったとおり、前の世代の戦闘員は陣営に一人もいなくなった。主の御手が彼らに向けられ、陣営に混乱が引き起こされて、彼らは死に絶えたのである」の部分に相当すると思われる。これは『申命記』における前後関係から、『民数記』第 21 章に見られる「ヘシュボンの王シホンとの戦い」（申命 2,24 — 37）、「バシャンの王オグとの戦い」（申命 3,1 — 11）がいずれも『民数記』21,21 — 35 に見られ、一方エドム人との交渉は、『民数記』20,14 — 21 に見られる内容が『申命記』2,1 — 25 に記されていることによる<sup>8</sup>。

次いで第 4 章において、シナイ（ホレブ）での契約の再確認がおこなわれる。「十戒」の名は 4,13 に現れるが、これは「主は契約を告げ示し、あなたたちが行うべきことを命じられた。それが十戒である」という形で示される。

そして第 5 章から第 28 章にかけてがモアブでの契約の本体に相当し、これは先に挙げた「原申命記」と呼ばれる部分に当たる。この部分は 3 つに分割され、まず①第 5 章から第 11 章は契約の根本精神、すなわち「原申命記」の序に当たる部分である。最初に第 5 章で十戒の復習がおこなわれ、次いで第 6 章で

は律法の根本とそれを守る理由すなわち神の恵みについて述べられる。そして第7章から第11章にかけては、神の選びの愛とそれへの応答の勧めが記される。

次に②第12章から第26章にかけては、契約の条項について語られる。まず第12章1節から第16章17節までは、正しい礼拝について述べられる。そして「正しい指導者について」語られるのが第16章18節から第18章22節までであり、a. さばきびと b. 王 c. 祭司 (=レビ人) d. 預言者 のあるべき姿が述べられることになる。それらの箇所を詳細に記すと、a. さばきびと 16,18 - 17,13 (特に 16,18 - 16,20) b. 王 17,14 - 17,20 c. 祭司 (=レビ人) 18,1 - 18,8 d. 預言者 18,9 - 18,22 (特に 18,15 - 18,22) となる。このdのなかに含まれる、「あなた (=あなたがた、注: 集合人格的用法) の神、主は、あなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てる。あなたたちは彼に聴き従わねばならない。このことはすべて、あなたがホレブで、集会の日に、<二度とわたしの神、主の声を聞き、この大いなる火を見て、死ぬことのないようにさせたまえ>と、あなたの神、主に求めたことによっている」(申命 18,15 - 16) については、後ほど詳しく検討する。

このモーセの言葉から理解されるように、これら4種の職能のうち、モーセが自ら務めたのは預言者職であった。それら4種のうち後半の3種は、「王職、司祭職 (共通祭司職)、そして預言者職」の順に記されているが、後の神学において「キリストの三重の任務」<sup>9</sup>とされる司祭職 (共通祭司職)、預言者職、王職に類比されよう。続いて第19章から26章にかけては、その他の規則と教えについて述べられ、あ. 逃れの町 い. 聖戦の掟 う. 雑則 (刑事、民事、宗教的禁制、社会的隣人愛) え. 収穫感謝の心得 となる。

そして③第27 - 28章では契約の結びが語られ、第29章から第34章ではモアブでの契約の締めくくりが補筆されている。

## Ⅱ 『申命記』と十戒の内容

『申命記』は、ギリシア語・ラテン語訳聖書の書題が「第二法の書」(deuteronomion : deuteronomium) とされているように、『出エジプト記』に記された十戒を再度掲載しているという印象を強く伴って伝えられた。すなわち、いわゆる「十戒」にも、旧約聖書中に収められた箇所としては二箇所が挙げられる。一つは『出エジプト記』20,2 - 17であり、もう一つは『申命記』5,6

ー 21 である。第一戒から第十戒まで、その順番は異ならない。以下、掟の現実となる「十戒」の次第について確認する。まず『出エジプト記』20,2-17 である。

「①わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。②あなたには、わたしをおいて他に神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。③あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかない。④安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。⑤あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。⑥殺してはならない。⑦姦淫してはならない。⑧盗んではならない。⑨隣人に関して偽証してはならない。⑩隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない」。

一方『申命記』56 - 21 の次第は、上記の『出エジプト記』における内容とほとんど同一であり、その要点だけを再説すれば、次のようになる。

「①わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。②あなたには、わたしをおいて他に神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない。③あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。④安息日を心に留め、これを聖別せよ。⑤あなたの父母を敬え。⑥殺してはならない。⑦姦淫してはならない。⑧盗んではならない。⑨隣人に関して偽証してはならない。⑩隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない」。

こうして『申命記』は、まず十戒に関して『出エジプト記』を内容的に再説していることが理解される。

### Ⅲ 『申命記』における「執り成し」と「会衆」

もっとも『申命記』は、バビロン捕囚の時期には、将来のメシア時代を預言した書であると考えられるようになった。すなわち、先に引いた「あなたの神、主は、あなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる」（申命 18,15）とモーセが語っている「わたしのような預言者」とは、元来は同じく 17,14 - 20 に見られる「王」のような「一連の預言者たち」を意味したものと推定されるが、次第に、将来来たるべき一人のメシアの姿であると見なされるようになった。つまり『申命記』は捕囚期に、「原申命記」に対する後代の加筆部分（ほぼ 1 - 4, 27, 29 - 34 章）に見られるような新しい意味を併せ、以前からの主題について再解釈されることになったのである。こうして『申命記』全体が、捕囚期に記された『エゼキエル書』40 - 48 章のように、あたかも、将来訪れるメシア時代の青写真のようになった。最終的にその完全な成就を見たのは、新約においてである。たとえば『ヨハネ福音書』5,46 は明らかにこの文脈で語られており「あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いているからである」にあって、来たるべき世において遣わされる「モーセのような預言者」とは、イエス・キリストを指している。

初期キリスト教徒たちが知っていたのは、このように解釈された、メシア時代を預言する書としての『申命記』であった。それは、神のみ旨と命令を教える、第二のモーセとも言える偉大な預言者を送る約束について語り、最後には、神の完全な救いの喜びのうちに神を愛し、讃え、礼拝する理想的な神の民の姿を描き出す書であった<sup>10</sup>。新約聖書におけるこのような理解の代表的な場合として、まず『使徒行録』3,22 よりペトロの説教が引かれよう。「モーセは言った。＜あなた方の神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる＞」。この中で旧約聖書から引用されているのも、先と同じ『申命記』18,15 であり、このルカ文書においても、先のヨハネ福音書と同様、「モーセのような預言者」としてイエス・キリストが立てられたものと理解されている。

一方『使徒行録』7,37 は最初の殉教者ステファノによる説教であり、この『申命記』18,15 を敷衍して、「集会」の語彙（エクレシア）を用いている。「このモーセは、イスラエルの子らにこう言った。＜神は、あなたがたの兄弟の中から、



わたしのような預言者をあなたがたのために立てる>。この人が荒れ野の集会において、シナイ山であなたがたに語りかけた天使と、わたしたちの先祖の間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのである」。この箇所に見られる「天使と、わたしたちの先祖の間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝える」という職能は、「執り成しを行う者」としてのモーセの役割をよく示すものであろう。

上の『使徒行録』の中で用いられている「集会」の語は、ekklesiaであり、「新しく清められたイスラエル」の意味であるが、これは『申命記』18,16で用いられているカハル qāhāl の七十人訳での訳語を淵源としている。『申命記』のこの箇所は、他に「ヨハネ福音書」6,14「イエスが行ったしるしを見た人々は<この人こそ、真の意味で、世に到来した預言者だ>と言っていた」、および同7,40「群集の中には、これらの言葉を耳にして<この人こそ、真の意味で預言者だ>と言う者たちがいた」で言及されている「預言者」の典拠箇所でもある。

「あなたがホレブで、集会の日に、<二度とわたしの神、主の声を聞き、この大いなる火を見て、死ぬことのないようにさせたまえ>と、あなたの神、主に求めた」（申命18,16）という箇所では念頭に置かれているのは、『出エジプト記』20,19に記された「民の恐れ」であるが、再録とも言える『申命記』5,24－27（たとえば5,25）「しかし今、どうしてなお死の危険に身をさらせようか」の背景ともなっている。『申命記』は、先に十戒に関して見たように、『出エジプト記』を概括的に再説する。したがって「金の子牛事件」（出エジプト32；申命9,8－14）をはさみ、『出エジプト記』では第34章において、『申命記』では第10章において「戒めの再授与」が語られる。

qāhāl の語は、『申命記』では他に9,10；10,4等において、いずれも<集会の日>というフレーズで用いられている。『伝道の書』の書題ともなっている「コーヘレト」という語彙は、この「カハル」と同根語であり、「呼び集める者」の意である。また『民数記』20,4「なぜ主の会衆をこの荒れ野に引き入れたのか。われわれと家畜をここで死に至らしめるためか」に見られる「会衆」の語もカハルである（他に20,6にも）。これらの用例は、カハルの語が、旧約聖書の内部ですでに「会衆」というイメージを超え、「共同体」のようなイメージを帯びつつあることを示していると言えよう。新約において「エクレシア」が「教会共同体」を表す語彙となり、イエスが父なる神と「エクレシア」との執り成し役となることの前表として、モーセはカハルと神との執り成し役を務めたの

である。

#### Ⅳ 「契約」の箱・「会見の幕屋」の渡河

ところで同じく『使徒行録』第7章、殉教者ステファノによる説教では、「わたしたちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋があった。これは、見たままの形に造るようにとモーセに語った方が命じたとおりのものであった。この幕屋は、(ヨルダン川の西岸に) ヨシュアとともにわれわれの父祖たちが運び入れ、異邦の民を制圧するなかで継承してきたものであり、その民はわれわれの父祖たちの眼前から神が駆逐し、ダビデの時代に到ったのである」(7:44) という部分が続く。「証しの幕屋」は、旧約聖書の原文では主に「オヘル・モエド」*’ōhel mō’ēd* (「会見の幕屋」) という表現で表されるが(出エ<sup>1</sup>29:42 ほか)、ここに述べられている「(ヨルダン川の西岸に) ヨシュアとともにわれわれの父祖たちが幕屋を運び入れた」という史実は、『ヨシュア記』3:14 - 17 で次のように記されている。「14) ヨルダン川を渡るため、民が天幕を後にしたとき、契約の箱を担いだ祭司たちは、民の先頭に立ち、ヨルダン川に達した」。「17) 主の契約の箱を担いだ祭司たちが、ヨルダン川の真ん中の干上がった川床に立ち止まっているうちに、全イスラエルは干上がった川床を渡り、民はすべてヨルダン川を渡り終えた」。

こうして、十戒を主眼とするシナイ契約の仲介者・執り成し役を務めたモーセがヨルダン川の東岸で没したにもかかわらず、契約の箱自体は共同体とともにヨルダン川を渡河し、約束の地に入ることになった。以下『出エジプト記』に遡って、十戒授与の次第を検討することにしよう。

『出エジプト記』では、先に瞥見したように、第20章に「掟」すなわち「十戒」について記されている。その後第20章の22節から「契約の書」と呼ばれる部分が続き、これは 1) 祭壇について 2) 奴隷について 3) 死に値する罪 4) 身体の障害 5) 財産の損傷 6) 盗みと財産の保管 7) 処女の誘惑 8) 死に値する罪 9) 人道的律法 10) 祭儀的律法 11) 法廷において 12) 敵対する者との関わり 13) 訴訟において 14) 安息年 15) 安息日 16) 祭りについて より成り、これが第23章の19節に及んでいる。その後、この契約に対する違反への警告が行われ(出エ<sup>1</sup>23:20 - 23:33)、第24章で「契約の締結」(第一回目)の次第が記され、第25章以降、幕屋建設の指示が下される。その幕屋、すなわち「会見の幕屋」の中に納めるべきもののうち、最初



に言及されるのが、「掟の板」すなわち「十戒」を記した板を納めるための「箱」に関する指示である。

「箱を担ぐために、アカシヤ材で棒をつくり、それを金で覆い、箱の両側に付けた環に通す。棒はその環に通したまま抜かずに置く。この箱に、わたしが与える掟の板を納めよ」(出エジプト25,13－16)。

この①「箱」に続き、第25章23節より順に、②備えのパンを供えるための「机」、以下「燭台」、「幕屋を覆う幕」、「幕屋の壁板と横木」、「至聖所の垂れ幕」、「天幕の入り口の幕」、③(献げ物のための)「祭壇」、「幕屋を囲む庭」、「常夜灯」、「祭服」、「エフォド」、「胸当て」、「上着」、「額当て」、「アロンとその子らの衣服」、「祭司聖別の儀式」、(焼き尽くす)「日ごとの献げ物」、さらに④「香を炊く祭壇」、「命の代償」、「聖別の油」、「香料」、「技術者の任命」、そして「安息日の厳守」について記述が行われる。ところが第32章においていわゆる「金の子牛」事件が起こるために神の怒りを招き、掟の授与はここで一旦中断され、モーセの執り成しによって、第34章で再び掟の(再)授与がおこなわれる。

第35章(4節)からは、幕屋建設のための準備が記される。これは先の第25章における「幕屋建設の指示」(第一次)に相当する。以下、「担ぐための棒」の規定に着目すると、同第35章12節から19節において「12) 掟の箱とそれを担ぐ棒」、「13) 机とそれを担ぐ棒」、「15) 香を炊く祭壇とそれを担ぐ棒」、「16) 焼き尽くす献げ物の祭壇とそれに付く青銅の格子、それを担ぐ棒」、以上計4個の「担ぐための棒」を準備せねばならないとされる。これらは第一次の際には、順に12) = ①、13) = ②、15) = ④、16) = ③となっていたもので、「香を炊く祭壇」と「焼き尽くす献げ物のための祭壇」の順序が入れ替わっていることが注目される。

以下、順に引用しよう。「ベツァルエルはアカシヤ材で箱を作った... 4) 箱を担ぐために、アカシヤ材で棒を作り、それを金で覆い、箱の両側に付けた環に通した」(出エジプト37,1－5)。これは上記12)に該当し、また第1次の際の(掟の)「箱」に相当する。

「アカシヤ材で棒を作って金で覆い、机を担ぐ棒とした」(出エジプト37,15)。これは上記13)に該当し、また第1次の際の「机」に相当する。

「彼はアカシヤ材で香を炊く祭壇を作った... また、二個の金環を作り、担ぐための棒を差し入れる環とした。この棒もアカシヤ材で作り、金で覆った」(出エジプト37,25)。これは上記15)に該当し、かつ第一次の際には順序が後になっていた「香を炊く祭壇」に相当する。

そして順序が逆になり、第38章で「焼き尽くす献げ物の祭壇」の作成が記される。「彼はアカシヤ材で棒を作り、それを青銅で覆い、棒を祭壇の両側の環に差し入れて祭壇を担ぐために用いた」(出エジプト38,6-7)。これは第一次の際の第27章6-7節に該当する。

「主はモーセに仰せになった。＜第1の月の1日に幕屋、つまり会見の幕屋を建てよ。あなたはそこに掟の箱を置き、垂れ幕を掛けて箱を隔て、机を運び入れよ、…＞」(出エジプト40,1)。これに続き、その実行が続いて記される。「モーセは掟の板を取って箱に入れ、箱に棒を差し入れ、箱の上に購いの座を置き、その箱を幕屋の奥に運び入れた。そして、至聖所の垂れ幕を掛け、掟の箱を隔てた。主がモーセに命じたとおりであった」(出エジプト40,20)。

これらの箇所では、「掟の板」を収めた箱、ないし机、さらには炊香また焼祭のための祭壇を「担ぐ」ための「棒」について言及が行われる。何度にもわたり、それらの箱等を「担ぐ」と言われていることに注目したい。この「掟の板」を納める箱を中心に抱くのが、先に引用した「会見の幕屋」(オヘル・モエド)であり、そこから神が語りかける場として機能する。「モーセは神と語るために会見の幕屋に入った。掟の箱の上の購いの座を覆う一對のケルビムの間から、神が語りかける声が聞こえた。神はモーセに語りかけた」(民数7,89)。

こうして律法の掟の板を収めた契約の箱は、それ自体共同体の生命ともいうべき至聖なるものとして、棒で担がれるべき実体との扱いを受けている。後に見るように、『エレミヤ書』の「新しい契約」(第31章)にあっては、この「掟の板」は人の胸のうちに授けられるべきものとされるが、その発端において、すでに共同体とともに息づく存在だったのである。

## V 「救いを執り成す者」

では次に、モーセが完遂した「救いを執り成す者」の伝承を見ておくことにしよう。このような「執り成し役」としては、王的人物と預言者の人物の二系統がある<sup>11</sup>。預言者の人物における伝承は、エレミヤ、エゼキエル、それに申命記的モーセ像のうちに認められる。

バビロン捕囚の時代以降、救済のための取り次ぎは、それまでダビデ王の家系の特権であったのに対し、民ないし民の選ばれたグループ、すなわち「聖なる残りの者」、あるいは卓越した一人の人物—まずは預言者—が、そこに与かるようになっていった。すなわち、王に加えて預言者たちの執り成しの活動も

また、紀元前 8 世紀以降、イスラエルの宗教的ないし政治的な生の中で、次第に大きな役割を担うことになったのである。その重要性は、紀元前 587 年におけるエルサレムの占領に先立つないし続く時期において、その頂点に達した。王制は絶えてしまったが、預言者職は留まり、その影響力は、イスラエルの捕囚下およびその後の刷新において、いっそう大きくなった。同時に、生起する出来事は、捕囚の前に神の威嚇的な裁きを告げていた預言者たちを正当化することになった。それゆえ預言者活動の経験は、救いの執り成しの新たな可能性を認識するための端緒を与えたのである。

救いの執り成しのあり方の変化に関して、王制に対する失望は小さからぬ役割を演じた。ヨシヤ王（在位：前 640 – 607）の後継者たちの無責任な政治は、ユダとエルサレムの滅亡陥落と、王国の民の離散を引き起こし、ダビデの家系をも存亡の危機に直面させた。ダビデ王朝に存続した構成員としては、まだ若くしてバビロンに連行されたヨヤキン王（在位：前 598 – 597）がいた。だがイスラエルの来たるべき復興の希望において、ダビデ家の役割は背後に退き、それに代わってヤハウェ信仰のうちに一致し新たにされたイスラエルの民が前景に進み出ることになった。イスラエルの真なる王とは、ヤハウェである。またエレミヤとエゼキエルの預言にあっては、来たるべきイスラエルにおいて、王家に与えられた約束はまだ、新しいダビデの人格のうちに生きている（エレミヤ 23,5 – 6；エゼキエル 34,23 – 24；37,24 – 25）。

しかし彼らによってさえ、救いの希望は、ヤーウエの恵みによって新たにされるイスラエルの共同体がもたらす。未来の理想的為政者もまた、この新たにされた共同体の一部であり、その役割は、集められたヤーウエの民の一致と、ヤーウエの意向に沿った生とを確かなものにすることのうちにある。それに対して第二イザヤは、ダビデに賜物として与えられた恵みを直接民にまとわせている（イザヤ 55,3 以下）。すなわち彼は、イスラエルの王として唯一ヤーウエを立てる。ヤーウエはイスラエルに向かいつつ、自らを「あなた方の王」と呼んでいる（イザヤ 43,15）。

上にも見てきたように、申命記的著作では、モーセは預言者として描かれ、執り成し役として罪深い民のために懇願する。「もし選ばれた人モーセがいなかったなら、神は民を滅ぼそうと考えていた。モーセは主の前に進み出で、神の怒りをなだめ、彼らに滅びをもたらさぬよう嘆願した」（詩篇 106,23）。『詩篇』のこの箇所は、『出エジプト記』32,9 以下に依拠している。しかしながらこの執り成しは、個人としてモーセに関わるものであった。彼は民のため、罪

深きイスラエルのために懇願した。その過程でモーセ自身もまた、神の怒りにおびえたが、この怒りの恐ろしき現実、彼をして、この怒りを民とアーロンの上から遠ざけるよう祈らしめたのである。

## Ⅵ 預言者エレミヤ

一方、『申命記』から最も大きな影響を受けた預言者として特筆すべき人物はエレミヤである。彼エレミヤの活動は、『列王記』下 22 章に語られている申命記法典（前述）の発見の直後に当たった。たとえばイスラエルのヤハウェに対する忘恩に関して、エレミヤ 24 - 7 と申命 6,10 - 13、また心の割礼に関してエレミヤ 4,4 と申命 10,16 を参照したい。

彼は当初、預言者としての召命を受けた後、先にも述べたヨシヤ王による「申命記改革」に共鳴した。この改革とは、いわゆる「原申命記」を基に、モーセによるシナイ契約（石版に記された十戒）への復帰を目指して着手された一大宗教運動であった。しかしヨシヤ王自身が前 609 年、アッシリアを支援するために進撃したエジプト王の迎撃を試み、メギドの戦いにおいて戦死したこと、それ以前からヨシヤ王の改革は政治的色彩を強く帯びようになっていたこと等により、エレミヤは次第に沈黙を守るようになる。

続くヨヤキム王は、エルサレム神殿における礼拝の持続を目論むのみで、新興目覚しいバビロニアに反旗を翻し、結局第一次バビロン捕囚を招く。この頃からエレミヤは、言わば「敗戦主義」とも呼ばれる方針を提言し、神の鞭としてのバビロニアの支配に屈することを訴える。だがそれは容れられず、時のユダの王たちが、エジプトと組んでバビロニアへの対抗を試みるのとは悉く対立する。このような状況は、彼の預言活動の最末期まで継続する。エレミヤは孤独の意味を省察しつつ（エレミヤ 16）、新しく小さき民の群れ（エレミヤ 20,13；24,7）との連帯に目覚めるようになる。こうしてエレミヤの生涯は、召命⇒自己無化⇒再召命⇒新しき契約の地平 というプロセスを辿ったと理解される<sup>12</sup>。

『エレミヤ書』第 31 章に記される「新しき契約」は、モーセのシナイ契約を超え、はるかに新約の時代を照射する。「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。しかし、来たるべき日に、わたしがイスラエルの家と結

ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らのところにそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、＜主を知れ＞と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない」(エレミヤ 31,31 - 33)。

ここには、モーセが神から受けた掟を、櫃に収めて担ぎ、共同体のうちに留めておいた荒れ野での放浪の時期から一歩進んで、その律法の板を人間個人・各自の胸のうちに授ける、という新たな進捗が認められる。その神のメッセージを受けるエレミヤは、神から言葉を受けるために孤独を強いられる。「あなたは、この土地で妻をめぐってはならない。息子や娘を得てはならない」(エレミヤ 16,2)。ここには、レビ人に嗣業の地がないという定めと似たものがある。「レビ人である祭司、レビ族のすべての者には、イスラエル人と同じ嗣業の割り当てがない。彼らは、燃やして主にささげる献げものを自分の嗣業の分として食べることができる。同胞の中で、彼には嗣業の土地がない。主の言われたとおり、主が彼の嗣業である」(申命 18,1 - 2)。レビ人は祭司という、神と民をつなぐ今一つ別種の仲介者として立てられた部族であったが、地方祭司の子であったエレミヤは(エレミヤ 1,1)、預言者という職能と身分を通じて、危機迫るユダ王国の民のために執り成したのであった。

## Ⅶ 第2イザヤと「主の僕」

そして「旧約聖書」の中で、おそらくもっとも完成された「執り成し役」の像を描き出すのが、「第二イザヤ」に見られる「主の僕」の歌(イザヤ 42,1 - 4; 49,1 - 6; 50,4 - 9; 52,12 - 53,12)である。特に第四歌は、新約における受難のイエス・キリストを髣髴とさせる部分を多く含む。「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く挙げられ、あがめられる。かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように、彼の姿はそこなわれ、人とは見え、もはや人の子の面影はない。それほどに、彼は多くの民を驚かせる。彼を見て、王たちも口を閉ざす。誰も物語らなかったことを見、一度も聞かされなかったことを悟ったからだ」(イザヤ 52,12)。

ここでは、主の僕が「栄え」、「はるかに高く挙げられる」というヴィジョンが語られている。そこには、十字架上のキリストを「栄光化」とあるとする『ヨ

ハネ福音書』への視点を<sup>13</sup>、はるかに遠く望むことができるだろう。ただ、その姿は悲痛である。

「彼に見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちは癒された。わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。苦役を課せられてかがみこみ、彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に者を言わない羊のように、彼は口を開かなかった。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか。わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から絶たれたことを。彼は不法を働かず、その口に偽りもなかったのに、その墓は神に逆らう者とともにされ、富める者とともに葬られた。病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは、彼の手によって成し遂げられる。彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで罪びとの一人に数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった」(イザ52,12 - 53,12)。

こうして、「主の僕」における代償思想は、確かに遠く十字架上のイエスを指し示す。しかしながらそこに「栄光化」の契機はない。第二イザヤの思想的継承者は共観福音書であり、『ヨハネ福音書』は十字架のうちに栄光化の実現を見たのであって、両者の間には神学的な省察の展開を見ることができよう。

## VIII 「蛇を挙げる」(ヨハ3,14; 民数 21,9)

先に、本稿冒頭で『申命記』の構造を概観した際、『ヨハネ福音書』第3章



に引用される「モーセが荒野で蛇を挙げたように、人の子も挙げられねばならない。それは彼のうちに信を置く者がすべて、永遠の生命を持つためである」(ヨハ3,14－15)に言及した。これはニコデモに対してイエスが語る言葉であるが、なぜここでイエスは、自らを「蛇」になぞらえつつ「十字架刑」を示唆したのであるのか。『民数記』第21章を振り返ってみよう。

「彼らはホル山を旅立ち、エドムの領土を迂回し、葦の海の道を通って行った。しかし、民は途中で耐え切れなくなり、神とモーセに逆らって言った。＜なぜ、われわれをエジプトから導き出したのか。荒れ野で死なせるためか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力も失せてしまう＞。主は炎の蛇を民に向かって送った。蛇は民を噛み、イスラエルの民の中から多くの死者が出た。民はモーセの許に来て言った。＜わたしたちは、主とあなたを非難して、罪を犯した。主に祈り、われわれから蛇を取り除きたまえ＞。モーセは民のために主に祈った。主はモーセに言った。＜あなたは炎の蛇をつくり、旗竿の先に掲げよ。蛇に噛まれた者がそれを見れば、生命を得る＞。モーセは青銅で一つの蛇を作り、旗竿の先に掲げた。蛇が人を噛んでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、生命を得た」(民数21,4－9)。

ここには、①「神とモーセに逆らう民の罪」、②「主による炎の蛇の遣わし」、③「民の悔恨」、④「モーセによる執り成しの祈り」、⑤「炎の蛇を作り、それを仰がせよという神の指示」、⑥「モーセによる青銅の蛇の鑄造と高挙」、⑦「民の仰ぎによる癒し」といったプロセスを見出すことができる。まずここには、反逆による民の罪がある。これは、十戒に象徴される神との契約を民が破ったという罪を内実とする。すなわち蛇の毒は、「契約の板」への反逆に必然的に伴う「死」を意味するものである。これに対して民は、自ら悔恨の意、すなわち立ち返りを表明する。モーセの執り成しを経て、神は「蛇」を炎で作れと命ずる。炎により蛇のもつ毒は失われる。さらに「蛇を作れ」という指示は神からの恵みである。そして「仰ぎ見る」という行為には、仰拝の念が含まれている。

本稿では先に、十戒の掟の板を収めた「契約の箱」が、共同体によって「担がれ」、その中心的位置を占めていたことを確認した。上の「青銅の蛇」と「契約の箱」とは、ともに高挙の対象となり、その本質はいずれも「恵み」であることが理解される。十戒は否定詞＋動詞の未完了形で記されており、掟の本質が、決して禁止命令ではないことを示しているとされる<sup>14</sup>。むしろ掟とは、共同体の構成員が自律的・内発的にそれに順ずるべきもののなのである<sup>15</sup>。

また『申命記』では、「あなたの神、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに対して、あなたに与えると誓われた土地にあなたを導き入れ、あなたが自ら建てたのではない、大きな美しい町々、自ら満たしたのではない、あらゆる財産で満ちた家、自ら掘ったのではない貯水池、自ら植えたのではないブドウ畑とオリーブ畑を得、食べて満足するとき、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した主を決して忘れないよう注意せよ」(申命 6,10 - 12)におけるように、既に「恵みの地平」が明らかにされている。このことは「主が心惹かれてあなたたちを選んだのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった」(申命 7,7)のような形で明らかにされる。旧約聖書におけるこの地平は、『ヨハネ福音書』では「言葉は肉となって、わたしたちの間に宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父の一人子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」。「わたしたちは皆、この方の満ち溢れる豊かさの中から、恵みの上に、さらに恵みを受けた。律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示したのである」(ヨハネ 1,14 ; 1,16 - 1,18)というかたちで止揚される。

## Ⅷ 十字架の必然性

本稿では、新約におけるイエス・キリストの場を『ヨハネ福音書』に描かれる十字架上に規定している。その姿は、『ヨハネ福音書』第3章に見られるイエス自身の言葉によれば「蛇」に比せられるのであるが、それと同時に、高く担がれる「契約の箱」つまり「掟の板」を内包した像であると理解できる。それはエレミヤの説く「新しい契約」をまっとうした姿でもある。

『ヨハネ福音書』が描くキリストは、終始一貫して、父なる神に対する「子」の身分に徹する。それは、モーセやエレミヤ、そして「第二イザヤ」が記す「主の僕」へと継承されてきた「執り成し役」を、十全に止揚する身分である。同福音書においてイエスは次のように述べる。「子は、父のすることを見なければ、自分からは何もできない。父がすることは何でも、子もそのとおりにする。父は子を愛して、ご自分のなさることを、すべて子に示すからである」(ヨハネ 5,19 - 20)。「わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わした方の御

心を行おうとするからである」(ヨハネ 5,30)。このような「子」としてのイエスを、ヨハネは「言葉」として規定する。「初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった」(ヨハネ 1,1)。「言葉は肉となり、われわれのうちに宿った」(ヨハネ 1,14)。

こうして、「執り成し役」の十全な像としての「子」は、律法を受けた共同体を内在的に執り成すべく、高く挙げられる必然性を帯び、「執り成す者」の姿は十字架上のイエスにおいて完遂される。『ヨハネ福音書』におけるその姿は、すでに受苦の姿であることを超え、栄光に輝く姿である。こうして「言葉」は栄光を受ける(ヨハネ 12,28)が、それは、旧約時代における「執り成し役」たちの系譜すべてを止揚するプロセスだと言える。それは、「言葉」を垂直方向に止揚するダイナミズムが初めて働いた場面であったと言えるだろう。

旧約時代には、まだ三位一体論が成立していない。これは「言葉」に関わる者すなわち預言者の位置・立場・身分が、いまだに定まっていなかったということの意味しよう。エレミヤは自己犠牲を強いられ、モーセはヨルダン川を渡河し得ず、第二イザヤの正体は不明である。つまり(神の)言葉すなわち第二位格に携わる者が、まだ垂直方向には参与しえなかったのである。けれどもイエスが、「掟の板」そのものの受肉体とも言うべき姿で挙げられることによって、子なる御言葉が天上なる父の傍らに住まいを得ることになった。つまり、十字架上の「子」に復活の生命を見出すなら、それは第三位格すなわち聖霊を認めることでもあり(ヨハネ 19,34)、かつ今や天上なる「子」のうちに「父」のすべてが見出されることにもなるのである(ヨハネ 14,9)。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなく、わたしを遣わした方を信じるのである。わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのである」(ヨハネ 12,44)。「わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わした方を受け入れるのである」(ヨハネ 13,20)。

## 結. 十字架と三位一体論

本稿冒頭に示唆したように、『ヨハネ福音書』にあっては、受難のキリストと復活のキリスト、そして昇天のキリスト、さらには聖霊降臨の原点となるキリストは、すべて十字架上に置かれる。筆者の理解の主眼は、その際、「十字架上」ということが、天の「父」の許にあるということと同義だという点にある。そのキリストが「御言葉」として、「子」として画されるということは、三位

一体論の成立と理解することができるだろう。キリストは十字架上において、すなわち地上、『ヨハネ福音書』の表現を用いるなら「世」に対峙した姿・「世」に打ち勝った状況において、復活の生命共同体を形成する。「わたしの王国は、この世に属してはいない。もしわたしの王国がこの世に属していたならば、わたしがユダヤ人たちに引き渡されないように、わたしの部下たちが戦ったことであろう」(ヨハネ18,36)。この際、復活とは常に十字架上で行われなければならない。三位一体論は、十字架上のイエスの復活を俟ってはじめて成立する。そして三位一体論の成立のためには、「血と水の流出」だけでなく、イエスが天上に挙げられるということが不可欠である。地上相互の関係だけに留まるとすれば、地域間の対立や地域間格差などは不可避である。それは、モーセが味わったような失望と落胆を再現するプロセスである。『ヨハネ福音書』のイエスはこう語っている。「この山においてでも、エルサレムにおいてでもなく、あなたがたが父を拝するときに来る」(ヨハネ4,21)。

本稿において検証してきたように、旧約聖書の段階では、「契約の掟の板」を授かったモーセは、共同体の中心に担ぎ上げられるべきものとしてこの掟の板を規定する以外になく、自らはネボ山山頂に没することになった。これは旧約時代、「言葉」を用いて執り成す役割に徹する者の宿命であったと言える。三位一体論がまだ成立していなかったからである。同じことは「新しい契約」を提示したエレミヤに関しても同様であり、彼はその「掟の板」を、各人に内在化させる地平までは明らかにしえたものの、その「掟」そのものと化すことは到底不可能であった。第二イザヤも、「高く挙げられる主の僕」のヴィジョンを描き出す域にまでは到ったものの、彼自身の像についてはまったく不明である。

おそらくイエスは、そして第四福音書を著した使徒ヨハネは、これらの先駆的預言者たちの系譜と意義をよく承知していたのであろう。究極的な執り成し役を務めうるのは、父なる神の仲介者たる「御言葉」としての「子」自身でしかなく、モーセに始まる預言者たちの系譜を継承するため、「契約の箱」が「担がれて」共同体に内在するのを止揚する意味において、「子」自らが「高く挙げられる」必然性を、第四福音記者はこれ以上ないほどに認識していたと考えられる。このような形で「子」が、契約の箱と同様に「高く挙げられ」るとき、それは天上なる父の姿を体現する「栄光の姿」に他ならず、そのわき腹からは「血と水とが流れ出て」(ヨハネ19,34) 聖霊発出の徴となる。かくして十字架上のキリスト磔刑像は、復活の生命・永遠の生命としての三位すなわち「父・子・

聖霊」の一体性を表し尽くすことになるのである。

## 注

- 1 Manabu AKIYAMA, János, „A „közösségért saját életet adó Jézus lelke” János Evangéliumában: a bizánci rítusú egyházban való biblikus és liturgikus teológia tükrében”, in: „*Testben élünk*”, pp.161-169, JATE Press, Szeged, Hungary, 2011. なお、この発表と論文により、筆者は 2011 年度のセグド国際聖書学会第 23 回大会において「会友表彰」を受けた。
- 2 創文社、2010 年刊。
- 3 たとえば、伊吹雄『ヨハネ福音書と新約思想』（創文社、1994 年）所収の諸論考を参照。
- 4 本稿では、基本的に聖書からの引用は『聖書 新共同訳』（日本聖書協会、1987 年）によっているが、文体を整えるなどの変改を加えてある。
- 5 旧約聖書の時代史に関しては、山我哲雄『聖書時代史 旧約篇』（岩波現代文庫、2003 年）が優れている。
- 6 荒井献・石田友雄（監修）『旧約新約 聖書大事典』（教文館、1989 年）所収の項目「申命記史書」を参照。
- 7 『民数記』の霊的な解説書として、M. E. トーレス＝アルビ『荒れ野の旅 亡命者の群れから神の民へ』（サン・パウロ、2005 年）。
- 8 *Biblia: Ószövetségi és Újszövetségi Szentírás*, Budapest 2008, 1384.
- 9 南山大学監修『第 2 ヴァティカン公会議公文書全集』（サンパウロ、1986 年）所収の『教会憲章』第 34, 35, 36 条、および 406 頁を参照。
- 10 フランシスコ会聖書研究所訳注『申命記』「解説」（中央出版社、1989 年）、15 - 16 頁。
- 11 以下、RÓZSA Huba, *Üdvösségközlítők az Ószövetségben*, Budapest 2001, 208-215.
- 12 拙稿「フラウィウス・ヨセフスの史観—エレミヤ神学と古典史学史の止揚—」（筑波大学大学院国際地域研究専攻紀要『地域研究』33, 121 - 144 頁所収、2012 年）、および宮本久雄「エレミヤの「告白」」（『聖書と愛智』53 - 185 頁所収、新世社、1991 年）、171 頁を参照。
- 13 この面に関しては、G. ネラン『キリスト論』（創文社、1979 年）、230 - 240 頁が詳しい。
- 14 宮本久雄「「神」言語の創る空間と人格—モーセと「神」言語との遭遇から—」（前掲『聖書と愛智』13 - 52 頁所収）、35 頁参照。
- 15 この点は、江戸時代の高僧・慈雲尊者飲光（1718 - 1804）による「十善戒」の雲伝神道的理解による提唱と通じ合う面がある。拙稿「慈雲と華嚴思想」（前掲注 2 拙著 591 - 620 頁所収）、604 - 613 頁参照。